

## 次世代を担う若手の指導 ～柳先生との思い出～

愛媛大学沿岸環境科学研究センター 教授  
森 本 昭 彦

### 1. はじめに

先生が突然亡くなられ7カ月もの月日が過ぎました。柳先生にご指導頂いたものの一人としてこの原稿の執筆依頼を受けましたが、このような原稿を書くことになったことが大変残念でなりません。私は愛媛大学で先生と出会い、そして先生のご指導を受けたことで今研究者として活動できています。本稿では、大学1回生での先生との出会いから振り返り、研究だけでなく「人を育てる」ことに力を注がれた先生とのエピソードを紹介します。

### 2. 柳先生との思い出

先生との出会いは、私が大学1回生で履修した先生の著書「海の科学」による講義でした。第一印象はとにかく怖い一言です。その風貌と声は迫力があり、黒板には読みにくい字が並んでいました。しかし、多くの方がご存じのように先生のお話は人を魅了します。入学したばかりでしたが、将来この先生の研究室に行って沿岸海洋学を勉強するのだと心に決めたことを覚えています。4回生になり希望通り先生のご指導のもと卒業研究を開始したのですが、私が感じていた先生への怖さは変わらず、意を決して質問に行っても話ができるのはほんの数分で、「まだ何かあるのか！」と言われ退室していました。このような日々でしたが、私なりに考え解析したことに関しては、先生は決して否定されることはなく、また良い結果が出ると本当に嬉しそうに「これは売れるぞ！」と喜んでくださいました。言葉は少なかったですがこのような時の先生の笑顔はほんとうにすばらしく、先生の学生は皆この笑顔で研究を頑張ることができたのではないかと思います。私の学生時代、先生は出張の連続で不在なことが多く、結局学生時代に先生とお話する機会は本当に少なかったのですが、時に先生から頂くおほめの言葉「よくやった！」と、研究を楽しんでいる先生の姿を見ていたためか、学部生その後の修士課程でも研究が辛かったという記憶はありません。先生は研究発表をされる際、必ず研究室のセミナーで予行演習をされていました。これにより学生は自分の研究成果が国内外へと発信されることを知ると同時に、これはすごい成果だと嬉しそうに話される先生の姿を見ることで研究に対する高いモチベーションを維持できていたのではないかと思います。私自身は学生には予行演習をさせながら、忙しいことを理由に自分では人前で予行演習をしなくなっています。この原稿を書きながら反省すると同時に、おそらく先生は学生に研究の楽しさを伝えるために、どんなに忙しくても欠かさず予行演習をされていたのではないかと思います。

先生は私たちに多くの発表機会を与えてくださいました。これも先生が人を育てることに力を注がれていたからではないかと思います。修士課程の時から国内の学会だけでなく、国際学会でも発表させていただきました。発表の前にはかならず予行演習があり、かなり厳しいコメントを頂くことも多かったです。また、発表後には必ず反省会があり、予行演習とは違い反省会での先生は優しくたと記憶しています。研究者になってからは、先生に依頼があったと思われる発表を、当時若手だった私に発表するようにと自分の研究成果をアピールできる場をたくさん与えて頂きました。「お前の仕事だからお前が話せ」と若手が話すには少し場違いな場所での発表も経験させていただきました。先生はとにかく人前で話しをすることの重要性を認識されていたのだと思います。その意味では、月に1回行っていた研究室の宴会では必ずテーマを与え、そのテーマについて出席者全員が一言ずつ話をするというルールがありました。落ちがない話をする

会なのに怒られることもありましたが、これも学生の将来のことを思っただけのトレーニングだったと思いますし、実際学生はどんどん話が上手になっていきました。

国際的な活動でも多くのことを先生に教えて頂きました。1999年から先生が九州大学を退職されるまで毎年1回東南アジアへいっしょに出張しました。しばらくの間、この東南アジアへの出張の目的が分からなく、また先生からも特に説明はなく、とにかく同行しなさいということでした。私としてはよくわからないが年1回海外旅行ができる程度の気持ちだったのですが、今考えると国際的な活動の経験を積ませるための出張だったのだと思います。実際、この海外出張の経験から多くのことを学び、今の研究活動に役立っています。海外の大学や研究所での立ち振る舞い、共同研究のシーズのを見つけ方、留学生のスカウト、共同研究者の探し方、目の前で私にそれを見せてくださいました。柳先生のもとで学位を取得し帰国した方たちと今現在共同研究が実施できており、さらにその共同研究者の学生が留学生として私のもとで研究をしています。このような海外とのネットワークの構築、そしてその維持を考え長期的な視点を持って私を海外出張に同行させたのではないかと思います。全く私たちにそのような話はされませんでした。先生は大きな視点で長期的なビジョンを持って私たちに様々な機会を与えてくださったのだと思います。

東南アジアへの年1回の出張はあるものの、先生のご指導のもと学位を取得したのち、実は先生といっしょに研究することは長い間ありませんでした。これも研究者として独り立ちするようにとのことだったと勝手に思っています。共同研究の打診は全くなかったのですが、少しは気に留めて頂いていたのだらうと思うのは、私が大学を移動した際に、「家庭訪問だ！」と言って私の研究室を訪問され、ほんの数分しか滞在されませんでした。先生は満面の笑みで「よかったな」とおっしゃられたことがありました。やっと先生といっしょに仕事をしたのは、環境研究総合推進費 S-13 でした。このプロジェクトでの先生は私が知っているいつもの強気な先生とは違っていました。やはり、大プロジェクトのプレッシャーがあったのではないかと思います。S-13 の5年間は先生と出会ってから初めて、いろいろなことを話すことができた期間でした。

令和2年度から始めた瀬戸内海の栄養塩循環に関する研究では先生にアドバイザーをお願いしました。この研究プロジェクトの会合では、これまでこんなことはなかったのと思うほど、いつも褒めて頂きました。特に、先生が以前行われたような愛媛大学と香川大学による学際的な研究を、私たちが再び行っていることを本当に喜んでいただきました。先生が期待されていた研究成果を出せるまで研究は進みましたが、それを直接報告することができなくとも残念です。本研究については、先生が亡くなれる2日前に進捗報告会で多くのお褒めの言葉と今後の研究方針に対する有用な助言を頂きました。この助言を忘れず引き続き瀬戸内海の栄養塩循環に関する研究を推進していきたいと考えています。

### 3. さいごに

私には多くのことを語られなかったのですが、先生は「人を育てること」に重点を置き、若い人にチャンスを与え、後ろからこっそり見守るという姿勢だったのではないかと思います。私も50歳をすぎここ数年いろいろ思うところもあり、先生に「どのような思いで学生を教育していたのか」、「人を育てるには何が必要なのか」等、直接聞きたいと思っていましたが、今更先生と面と向かって話す恥ずかしさもあり、同じ松山に住んでいるにも関わらず結局最後まで「先生二人で飲みに行きましょう」と声をかけることができませんでした。声をかければきっと様々なお話をちょっと照れながらしてくださったのではと思うと後悔しかありません。先生がどのような思いで我々を育ててくださったのかは今となっては分かりませんが、日本だけでなく海外でも先生の弟子は活躍しており、この原稿を書くことで改めて先生の偉大さとやさしさを感じることができました。先生の弟子のひとりであり、先生が研究を始められた瀬戸内海に面する愛媛大学で研究するものとして、残りの研究生活の多くの時間を瀬戸内海の研究に注力したいと思っています。